



Title	鉄砲伝来異説について
Author(s)	有水, 博
Citation	大阪外国語大学論集. 1993, 9, p. 257-264
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79613
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

鉄砲伝来異説について

有 水 博

〈はじめに〉

1993年4月24日と25日の両日にわたって、UCLAにおいて、「ポルトガルの伝統」と題する国際シンポジウムが行われたが、同大学院の博士過程に在籍中の本学ポルトガル・ブラジル学科卒業生平田恵津子さんの紹介で、本学からは、河野彰先生、シミコ・イケダ先生と筆者が参加し、それぞれ報告を行った。

筆者は、本年がポルトガル人の種ヶ島渡来450周年に当ることから、ここ数年、国立歴史民俗博物館の宇田川武久助教授が主張している鉄砲伝来についての異説（日本に鉄砲を伝えたのは、ポルトガル人ではなく、倭寇という説）を、紹介しつつ、誰れが最初に鉄砲を持ち込んだかという点だけでなく、鉄砲の導入がもたらした技術革新的側面、それまでの日本人が知らなかった西欧文明との遭遇という、より総合的な文脈の中で、鉄砲伝来の問題も取り上げるべきである旨、指摘した。

以下は筆者が、ポルトガル語で行なった口頭報告¹⁾を、和訳し、註を付したものである。

0. 導入部

今年、1993年は、ポルトガル人が最初のヨーロッパとして日本に来た450周年に当るので、日本の各地で一連の祝賀行事が行なわれつつある。私も、この日本とポルトガルが初めて接触した時期について、最近日本で、新しい学説が出ているのを紹介することで、ささやかながらこの祝賀行事に個人的に参加することにしたい。

1. 日本における鉄砲伝来の歴史的意義

日本に最初に来たポルトガル人は、色々な文物の中で、特に鉄砲を最初にもたらした。

これは種ヶ島という名の島に、初めは持ち込まれたものである。この火器即ち鉄砲（エスピングルダ）は、多量に模造され、数年の間に日本中に広がった。というのは、当時の日本は、全国的に長く続いた戦国時代の最盛期にあり、新しい火器が非常に求められていたからである。一般に、この鉄砲が戦さのプロセスと、その決着を早くつける結果をもたらした、この戦乱の時代を終らせるのに貢献したといわれている。同じくこの鉄砲が、戦さを変容させた。槍を持った騎馬武者は、鉄砲を持った徒士の中間との戦闘で負け、これがひいては封建的な郷土（フィダルゴ）階級の没落と、

それに続く將軍の中央権力への従属・官僚化への道を開いた。要するに、鉄砲は、封建制から日本の近世に向かう飛び石のひとつとなったのである。

2. 鉄砲の伝来についてのある異説

今、ここに1988年マカオで出版された、三人のポルトガル人ジャーナリストの共著による種ヶ島の美しい写真を中心とした一冊の本²⁾がある。この本の解説の部分³⁾に、日本への鉄砲伝来について、最近新しい学説があることを述べている。次にこれを引用しよう。

『ここに奇妙な説が出てきた。佐倉にある国立歴史博物館の軍事史研究家、タケン・ウダガワ（タケヒサの誤りと思う）先生は、日本に最初に鉄砲をもたらしたのは、ポルトガル人ではなく、マラッカから海賊がもたらしたものだと言張する。宇田川氏は、彼のいう海賊が、ポルトガルの鉄砲も輸入したのか、又は彼らはそれ以前からマラッカの銃（arcabuz）の取引を既に開始していたのか、説明していない、このマラッカの銃とは、アルブケールケが、マラッカで遭遇した類の銃で、ポルトガル製のモスケット銃の火力の前では、なんの役にも立たなかったものである…』

我々の知る限りでは、宇田川武久氏は、「鉄砲伝来の再検討」⁴⁾という論文を1986年に、また、1989年には「鉄砲伝来」⁵⁾という、新書を著わした。

彼の説によれば、「鉄砲記」は、日本側の殆ど唯一の史料なので、日本の歴史家達はこれに頼っているが、この史料は、それ程全腹の信頼を置ける程のものではない。というのは、種ヶ島に鉄砲がもたらされた約50年後に書かれたものであり、また「島の領主」の偉業を讃える性質の文書だからである。

宇田川氏自身は、日本で今迄殆ど知られていなかった「朝鮮王朝実録」を史料として使うと同時に、日本や東南アジアの国に保存されている鉄砲の実物のコレクションを調査し、日本に最初に鉄砲をもたらしたのは、和寇（筆者補足：14世紀では日本人の海賊、16世紀は中国人中心）であって、ポルトガル人ではない、と結論付けた。彼の主張の根拠は、ヨーロッパの古式銃は、多くの点で東南アジアの銃と異なっているところ、日本の銃はマラッカ型と同じであるというものである。

異なっている点は、次のとおり。

- 1) 火縄の装置の取り付け位置が異なる。
- 2) ヨーロッパの火縄銃は、鶏頭の方向が手前（東南アジア製と逆）になっている。
- 3) 火挾を弾くバネが、内部に装置されている。
- 4) ヨーロッパの火縄銃は、射撃に際しての姿勢は、頬付けでなく肩宛となり、さらに銃身を支えるストックを使用する⁶⁾。

上記の項目のうちの幾つかは、筆者から見ると、ヨーロッパの銃の代表としてアルカブース銃とモスケット銃（日本に鉄砲がもたらされたより後の1560年頃登場）を混同しているのではないかと

いう気がする⁷⁾。アルカブース銃は、モスケッテ銃以前からあり、より軽く、銃身を支えるストックも必要としない。

宇田川氏は、次に「朝鮮王朝実録」に基づき、1544年即ちポルトガル人が日本に初めて来た年の翌年に、朝鮮南部のひとつの島に、一隻の中国のジャンクが停泊したので、朝鮮の当局者が臨検しようとしたところ、船から銃撃され、二人の死者と二人の負傷者を出したという記録を引用している⁸⁾。その時船上には、約90名の人が乗っており、日本方面へ逃げたとされている。更に、その3年後の1547年の記録には、すでに福建人が倭奴と交通して、彼等に兵器を与え、かつ火砲の打ち方などを教えたのは、中国と朝鮮にとって、たいそう不利なことだと、あるのを引用している。

以上述べた点のうち、議論の余地があると思われる点を、次にあげる。

- 1) 宇田川氏によれば、日本の鉄砲はマラッカのと同じのことである。しかしマラッカ王国は、1511年、即ちポルトガル人が初めて日本に来た年より32年（中国南岸に到達した4年前）も前からポルトガルの支配下にあった。従って、日本の鉄砲が、マラッカ型と同じだからといって、マラッカの鉄砲が、ポルトガル人によってもたらされたものではないと断言することはできまい。むしろ逆に、鉄砲が、その原産地の被支配者によってよりも、支配者（ポルトガル人）によって日本に持ち込まれる可能性の方が高いといえまいか。これは特にポルトガルの商人が、アジア地域に於ては、主としてアジアの産品を商い、ヨーロッパ商品の扱いは、より少なかったという点を考慮に入れると、そうなる。彼等は、既に利潤を極大化しようという原理で動き、いわゆる三角貿易を行っていたのである⁹⁾。

この点、宇田川氏は、ポルトガル人の活動のグローバル化する特色、その文化の普辺性（混血、何でも受け入れてしまう雑種性）を見落しているのではあるまいか？

- 2) 第二の点として、宇田川氏は、朝鮮王朝実録の鉄砲に関連する最も古い記録として1544年のものを引用しているが、これはポルトガル人が到来した、ほぼ同じ時期に和寇も鉄砲を運んでいたという状況証拠を提示しているだけで、和寇がポルトガル人より先に、マラッカの銃の取引を既に開始していたという証拠にはなっていない。

ここで同人の主張に反論する意味で、次の問を出したい。

もし、鉄砲が和寇によって事前に導入されていたとするなら、何故その事実が、日本では知られずにいたのであろうか？当時の日本は戦国時代の最盛期で、新しい武器に関する如何なる情報も、たちどころに噂がひろがっていたのではないか？（種ヶ島での鉄砲発射の噂を聞いて数ヶ月を経ずして堺の刀鍛冶や、根来家が種ヶ島を訪れている）。あるいは和寇による鉄砲の持込みが密輸だったという理由で機密が保たれたと主張するとしても、戦国時代に密輸を有効に取り締り、罰することができる程の管理体制があったであろうか？秘密にする必要性はあまりなかったのではあるまいか。

反論は、以上にとどめて、鉄砲導入の問題を筆者なりに現代史的な別の観点から考えてみたい。

3. ポルトガル人がもたらした技術革新

3.1. 宇田川氏が、その著書で引用している島津家文書によれば、近衛^{なかいえ}種家は種ヶ島^{とぎたか}時堯宛の書状で「種ヶ島時堯が南蛮人から相伝した鉄砲薬は、比類がないから、薩摩の島津氏を介して幕府へ調合法を伝えて欲しい」と依頼している¹⁰⁾。

これは、ポルトガル製の火薬が、その品質に於て、日本人が模造したものや、和寇の仲介により輸入した火薬より、はるかに優れていたということを示している。ここで14世紀から始まった鉄砲の発達の上で、最大の困難のひとつが、火薬の不安定な性質の克服にあったことを想起する必要がある、これを最初に克服したのは、西欧人であった。ここから火薬の改良は、ポルトガル人が日本にもたらした技術革新であったといえよう。

3.2. 更に同氏は、大名の間、及び大名と将軍の間で取り交わされた幾つかの書簡を引用し、ポルトガル人がもたらした鉄砲は、実戦的な目的では使われず、諸大名が自分の守護職を守るための珍しい献上品として使われたと結論している。

勿論、当初鉄砲は発射するまでの手順に時間がかかる武器であった。第一に、細長い棒を使って、銃の筒先から火薬の入ったカプセルと丸い弾丸をつっ込む、次に弾そうの上部の導火用の小さい穴に火薬を少々つめる、更に火縄の火を起こすため口で吹く、等々。応々にして、火縄銃手が発射する前に敵の矢で射抜かれてしまうこともあったであろう。

ヨーロッパでも、当時戦闘で火縄銃手は、一人一人孤立した狙撃兵として用いられていた。日本では鉄砲伝来後、28年たって初めて織田信長という武将が、火縄銃を使った新しい戦法をみだした。それは、火縄銃手を3つのグループに分けて、騎馬武者止めのバリケードの後に配置し、3つのグループが、リレー式に交替で発射するというやり方である。火縄銃は、こういう使い方をされて初めて戦闘の主要な武器となったのである。

従って、ポルトガルの鉄砲が、実戦用というより当時の日本のお偉方^{お偉方}の間の献上品の役割を演じていたとしても、なんら不思議ではない。

しかし、ここで注目すべきは、お偉方^{お偉方}の間の高価な献上品として使われるには、ポルトガルの鉄砲が、普及品の鉄砲とは違ったなんらかの優れた点があったと考えるべきであろう。

そこで思い出すのは、今日でも種ヶ島で語り継がれているある民話である。

その民話とは、矢板金兵衛という種ヶ島の鍛冶屋が、種ヶ島の領主に、ポルトガル人から買い取った鉄砲を真似て、日本で最初の鉄砲を造るよう命じられた話である。彼は少なくとも外見は、オリジナルとそっくりの鉄砲を作り上げた。しかし、試し撃ちをすると鉄砲の筒の手前の底が抜けて火が吹き出し、大ケガをしてしまう。彼（この場合日本人全体）は、鉄砲の筒の製作過程で、筒の後の端をどういふ風にふさぐかを知らず、単に鉄を溶かして流し込んで置いたのであろう¹¹⁾。何度

か作り直すが、うまく行かず、遂に鍛冶屋金兵衛は、鉄砲を仕上げるための秘密を教えてもらうことと引き換えに、美しい娘をポルトガル船の船長に差し出す決心をする。次の年、ポルトガル船で、ポルトガル人の武器職人がやって来て、金兵衛に筒の後部を、しっかりとふさぐためのネジの原理を教える。これが当時の日本人が、まだ知らなかったネジのメカニズム導入の始まりであろう。

伝説的な技術移転のお話である。

別の話しになるが、現代の日本人の専門家所庄吉氏によれば、マラッカ型の火縄銃の最大の利点は、改良された点火装置＝火縄の機構にあり、湿気や雨に対して効果があったという¹²⁾。つまり湿気や雨が多い日本では、マラッカ型の鉄砲が実戦向きで、そのため、マラッカ型の火縄銃が、日本で多量に模造されたと思われる。

現代風にいえば、その場の使用条件に、より敵したアプロプリエイト・テクノロジーの導入である。

〈結 論〉

以上述べてきたことから、宇田川氏の説、即ちポルトガル人が日本に到着した頃、和寇は、多量の鉄砲を日本に密輸していたという説が正しいとしても、これによりポルトガル人がもたらした技術革新の重要性が減じるということにはならない。技術革新とは、繰り返せば、この場合、火薬の新しい調合法と、ネジの原理である。

鉄砲の導入の問題は、唯単に誰れが最初に物理的に運び込んだかということを検討するだけでなく、より総合的な広がり・応用技術を生むもとなる技術移転がどう行われたか、その技術革新を育てた異文化・異文明との遭遇という広い観点から、扱われるべきである。

一言でいえば、ポルトガル人による日本への鉄砲伝来は、日本の文化史上の大きな出来事であったといえよう。

最後に、宇田川氏の主張の中で共感できる点は、鉄砲の実物資料の検討（特に文献史料が少ない時は）・活用が必要であるという点と、非公式・非合法（和寇等）の通商の重要性、例えば氏が示唆している日本・ポルトガル間の歴史的交流の開始時に和寇がはたしたと推定される仲介者¹³⁾としての役割の重要性の指摘である。

註

- 1) 口頭報告の原題は、Os Primórdios das Relações Históricas Luso-Nipónicas。（日本とポルトガルとの歴史的関係の始まり）。当初は、鉄砲伝来の問題だけでなく、日本とポルトガルとの歴史的関係の始まりにはたしたと思われる和寇の役割をも扱うつもりだったが、問題が大き過ぎて、はたせず、本稿では内容に即して「鉄砲伝来異説について」とした。
- 2) Avelino Rodrigues, Leong Tai, & Gonçalo Cesar de Sá, 共著
“TANEGASHIMA”—A Ilha da Espingarda Portuguesa, Instituto Português do Oriente, 1988

- 3) 同上21頁。
- 4) 宇田川武久「鉄砲伝来の再検討」in. 『戦国日本と世界』。昭和61年。
- 5) 宇田川武久「鉄砲伝来」中公新書，1990年。
- 6) 同上9頁。
- 7) VERBO 等の大百科事典によれば，アルカブース銃は，15世紀末よりスペインの軽騎兵が戦闘に用い始め，当初は銃身の前部を支えるストックを用いたが，間もなく，軽量化し，これを使う必要がなくなった由（982頁）。又挿絵によれば火縄の鶏頭もマラッカ型と同じ方向に倒れるように見える。これに対しモスケッテ銃は，ポルトガル人の日本到来より後の1560年頃より用いられ始め，（1215頁），アルカブース銃より重く，射程距離も長く，前部を支えるストックを必要とした。従って日本の鉄砲と比較すべきはアルカブース銃で，モスケッテ銃ではなからう。（前記5の著書9頁の写真は百科事典のモスケッテの写真と瓜二つである）。
双方の銃が17世紀中葉までヨーロッパの狙撃兵の主要な武器であったという。
本稿の2で引用したマカオで発行された「種ヶ島」という写真集の解説にも見られるように，1511年のマラッカ王国征服の際，ポルトガル側が使ったというのはモスケッテ銃ではなく，アルカブース銃の火薬が優れたものではないか？モスケッテ銃が強力であったためか，又は，フロイスを含め，ポルトガルの後世の歴史家が同じ語を繰り返し使わない修辞上の必要から鉄砲（*espingarda*）という総称の代りに，当時未だ存在していなかったモスケッテという言葉を用いていると思う。
- 8) 前記5の著書12頁。
- 9) 岡本良知「日欧交通史の研究」等。同書によれば，ポルトガルの商人達は，対日通商に於ては，1544～1555年の間は，主として中国のジャンクをチャーターし，中国人の真似をしていたが，1555年以降，明朝の対日本人通商禁止を利用し，もっぱら，日・中間の貿易を独占していた由。ただポルトガルの商人は，16世紀前半の記録を残していないので，この間の詳細は不明のようである。
- 10) 前記4の著書の21頁。
- 11) 平山武章「鉄砲伝来考」。平成2年和田書店。22頁。及び本年3月末，筆者が種ヶ島のバスガイド等から聞いた話。
- 12) 所莊吉，陳舜臣対談「鉄砲伝来」，日本史探訪，12。
- 13) 南浦文之の「鉄炮記」には，ポルトガル人が始めて種ヶ島に漂着した時，船側の代表として，西村織部丞と筆談した人物を大明の儒生で五峰と伝えている。宇田川氏は，鄭舜功の「日本一鑑」等に基づき，この五峰なる人物が，16世紀半ばに活躍した安徽省出身の倭寇の大頭目，王直であるとしている。

“Os primórdios das relações históricas luso-nipónicas”
(Primeira parte: Sobre uma nova tese referente à introdução da espingarda no Japão)

Hiroshi ARIMIZU

(Resumo)

Surge, nestes últimos anos no Japão, uma nova tese de que foram piratas sino-japoneses, e não portugueses, que introduziram a espingarda no Japão. Isto é uma proposição do Prof. Takehisa UDAGAWA do Museu Nacional de história. Ele, investigando colecções de antigas espingardas preservadas no Japão e em alguns países do sudeste-asiático, alega que a espingarda japonesa seria diferente das européias em múltiplos pormenores e idêntica às malaias. Por outro lado, o investigador, baseado em uma Crônica da Dinastia da Coreia, quase inédita no Japão, sustenta que, já nos anos de 1544 a 1547, os piratas sino-japoneses transportavam armas de fogo ao Japão, o que implicaria a precedência dos contrabandistas asiáticos na introdução da espingarda.

Contra essa proposição, o relator desta comunicação questiona a validade do argumento; Primeiro, uma dúvida de que o investigador teria confundido, como a arma de fogo mais representativa do Ocidente: o arcabuz com o mosquete (que apareceu depois de 1560). E o reino da Malaca, terra da origem da espingarda asiática, encontrava-se sob o domínio português desde 1511, razão pela qual não exclui mercadores lusitanos como transportadores das armas asiáticas; Segundo, se os piratas efetivamente tivessem introduzido anteriormente a espingarda, por que é que esse hipotético fato teria ficado inédito no Japão, onde qualquer novidade sobre umas armas se espalhou de um dia para o outro, como no caso da espingarda portuguesa, no pleno período da guerra civil?

Ademais, o relator desta comunicação propõe um novo ângulo de vista contemporâneo, que é a transferência de tecnologia: inovação tecnológica introduzida pelos portugueses: nomeadamente nova técnica de compor os ingredientes dos explosivos e os mecanismos, até então desconhecidos no Japão, de “parafusos”. Isto para tapar a extremidade traseira do cano da espingarda com maior resistência, bem como outras aplicações mecânicas. E a razão pela qual a espingarda do tipo asiático se copiou em série e se espalhou no Japão, reside no fato de aperfeiçoado dispositivo de mecha, à prova de humidade e a chuva, que são características do clima do local de uso, sendo assim uma introdução de “Appropriate Technology”.

Concluindo: O fenômeno da introdução da espingarda não deve se reflectir simplesmente quem a trouxe primeiro, mas sim num âmbito mais amplo da transferência de tecnologia e um encontro com

uma nova civilização que a fomenta, constituindo o fenomeno um grande acontecimento na história cultural do Japão.